俗說辨

三　公卿

1 3
1834
3

イ 3
1834
3

イ 5
1271
3

お初信況雑巻三目録

公卿

一 大織冠鎌足蜜女と称して寶珠を丸めしと説

一 榊女人麻呂榊樹より生ずる説

一 阿倍仲麿鬼となりて吉備大臣をあなどる説

一 田村利仁呉公を征せしとき石勒明主に対して説

附田村利家狩麻乃屋を造る説

一 百合若大臣むくりを退治の説

一 玄番丞手負の鷲の浦に流れ松風村雨に逢説

一 在原業平卒去の年まで或は昇天と云説

一 稚内を延喜帝第四子と為す育母と云説

本朝俗説辨三

公卿

○大織冠孫足蛍女を賴て寶珠をかへすと説

俗説に云藤原孫足といつる人藤の源をかりて入鹿の大臣を
うちうしなひ世に賞ありて右今帝なる官職に任ぜらるとあり大織冠
と号しうしなひ大織冠に二人の姫あり一は光明子と云聖武帝の
后に立ち二は光仁女と云ふ光仁女に云ふ所の子なる宗尊帝の后に立ち
彼光仁女に弟戸ね軍うんそと云ふ所丈として死京磐泗濱に
西向不背死の方位奥後ろに立て漢破志度浦に
弟乃沖にて寶珠を龍宮にうばはれしかば孫足ゆくえを

なるを分てなして漢列よりてうしを蠶女を妻とし
ひとりの男子をうしなひ房前大臣淡海公と申いこれなり
孫足比賣女を宮に入てそして寶珠をうばひかへすなり
一說に淡海公房前の浦よりたまをかすひて寶珠をれ
ゆるす房前大臣い彼蠶女をみかへ十三歲よりそだてさ
所基菩薩をうとをしひ比丘尼よりとかの蠶女の母に法華經傳
をうけたてまつる　いまわれ孫くの初めてうを反畧して記を
今按ずるに說授なり　藤氏系圖を考るに藤原北家
和朝臣より出る孫足比賣に仕へ奉る天智帝ト訪の妃を設
先て藤原姓を賜はり孫足といひしなり名ちりと羅山文集

十謬傳の詩よと藤不經鎌性依舊とうたひ藤原の後
わらべをもうべし又大織冠は中臣鎌足の子記を考るに孝德帝
時官七又十三階の冠をさだめ中大兄織冠以織冠
之是第一之冠也正一位授藤原系譜貞和紀孫足とうたる
錦冠を賜り又織冠をたまはる後に織冠をたまはる冠
よりの名を附これ号せり名也又光明子孫足の孫にて
比等の女なりと不比等に女子三人あり一い宮の文武帝の后
にて聖武帝の母なり二い光明子聖武帝の后にて孝謙
帝の母なりと三い女比咩揚貴妃室なり　ゆゑに光明女
と云者なり又唐の字帝い貴なりて孝德齊明の時なり

あらて皇武帝ありとうの説なり渤海を辛亥とし
六年を紀元辛酉とす重武即位ありて天平元年
より光仁まで后より桓武天平元年
養老四年に辛亥とあり渤海を渤海王とつかせ
記し天平寶字四年八月廢帝勅曰太政大臣藤原朝臣勲績
蓋於宇宙朝賞未光人爵宜依太公故事追贈正十二品
封為渤海郡王とかり近江を古い渤海と書き二番目紀事紀
よと渤海とあり西條松下氏日本紀ようし近江を番名日渤海
國府の東西時中法大水殆如海水渤海郡渤海王遠
渤海國　とそのわいうしくしい渤海とそこのいうこと和名抄
近渤海王　ちかいはうみ

渤海郡近江とあるへ[illegible]を近江より封せらるる故に渤
海公と号せし也文房前の渤海郡男
なりとは辛酉年歴半實を考へるに俗説の誤ともいへし但し
紀に云事なりと日本紀に元恭帝十一年為新通始定族系
新　考るに人成冠ひわ[illegible]右紀
一あり[illegible]族を姓と為と賜る同十四年秋九月天皇渤海の使より
しかるに麋鹿猿猪おろ[illegible]皆よりも蝿のごとし又
とと鹿月ひとつの獣をだく[illegible]
てうつるとなり[illegible]
ひとつとなり[illegible]
とぐとを獣をひへしとあるとの白水郎をひのとあるの

乃海底をくぐりひとつへぐりとうみをくしていろ中ゆく
をばもぐりゆくうわまちゆくと云男棲後とつをれいの波玉長邑
乃海人とてゆくれ白水郎よりとれ多り腰よりをくとつを
多海底よりわきぐりてゆくてゆくて海底ゆ大多蛾わ
ゆくをゆくをひまちと法人云海神乃語とゆ乃珠ひたりひ
の腰よりわんしつゆ左ゆ男棲後中ゆくゆ入でゆ大腹なぐ
ゆくうゆいの息多へて波乃ゆ死せり縄ををゆしゆ
ゆるゆゆ六十ひゆ及乃ゆ中ゆ中ゆ珠腰
乃ゆゆわゆゆ大さ桃子乃ゆ乃ゆ則海神ゆ中ゆ待
してゆゆくれ歎をゆゆゆゆ男棲後ゆゆゆゆゆゆ

墓をゆゆゆゆゆゆ墓ゆ今ゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆ説ゆ妄作ゆゆゆゆゆゆ

○材ゆ人磨材樹ゆゆゆゆゆゆゆゆ説

俗説云柿ゆ人磨柿樹ゆゆゆゆゆゆゆ

今按ゆゆ妄説ゆゆゆ説田新撰姓氏録曰柿ゆ朝臣
大ゆ云日新居大足宿禰押人命之後也敏達天皇御世俗家ゆ
柿樹ゆ柿ゆ氏ゆゆゆ説をゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
他ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

山文集曰従三位柿本朝臣人麿ハ持統文武に仕へ或ハ近江
の舊都に過りてハ古都の荒廃に従ひ或ハ雷岳に御
遊に侍りて歌を詠し朱鳥三年夏四月草壁皇子薨を
文武四年四月明日香皇女薨をも皆人麿挽歌をよミて哭
を紀州讃州讃藝國を經歷して詠歌あり人丸石見の
國にありし時病て死せんとしける時みづから歌をよミて妻
依羅娘子和してかなしむ

万葉集云在石見國臨死時自傷作歌一首 柿本人丸
かも山の岩ねしまける我をかもしらずと妹かまちつゝあらん
柿本朝臣人麿妻依羅娘子二首 けふ〳〵とわかまつ君ハ石川のかひにまじりてありといはずやも
たゞにあはゞあひもかねてん石川に雲たちわたれ見つゝしのばむ 人丸家集云石見にて
たなびく松の木のまに……
よろ月をみてや……

をみて 其外平生乃和歌のせて家集萬葉集にあり
つゝ吉野山の櫻ハ人丸か心にハ雲かとのミなむおほえける ほの〴〵明石浦の朝霧の歌ハ人口に

にありし辛亥乃年をも明ならず
和漢合運云神亀元年三月十八日人丸卒 さもあらず挍考藤樹云人麿卒去の歳四十二歳
ある人云今畫圖に白髪なるけるハ大に非なり 撤
書紀按蔵云三月十八日ハ人麿忌日也昔ハ和歌所にて毎月祭ありし之
にありて歌塚と号して 其墓ハ初瀬にあり和州初瀬
云ある説云人丸の墓ハ初瀬にあるよし然ら人丸の墓といひて
に人丸の墓ハ初瀬にありといふハ歌塚といふ人丸の……
墓ハ大和添上郡櫟本といふ里に治道宮といふ神社ありしと
記に櫟本といふ里に治道宮といふ神社あり大和の柿本寺
に柿本寺といふ所の中に人丸の……
よしあり柿本といふ所に人丸の墓ありと云大和名所記
ふるあり柿本村といふ一里半南新庄村によしありといふ人丸
のいふ所に人丸がやうにありしとなん
にさそくなりとて人丸の墓をたてゝ人丸とぞ若山下に
ときらせざりしを村の者どもわさとたてゝ……
播州明石乃浦にありも
三國誌云人丸墓播磨によりて一書
に明石の浦に人丸の塚ありと云
わりひいさく播州明石乃浦にありも
播州ひいさく石見国高角山にありとみへたるを
か云大和若山より十町
バかり西に人丸墓あり
月かけ玖志略云石見国高角 附柿本人丸没せ萬葉集云石見国
人丸墳ハ石見国高角山下大山里にあり当林雑誌云
人丸をまつる 縁りありて人丸の社あり一書に云下野
宮後文月神ハ
終りまちくまりとつへことも大儀姓氏録乃説によ

をべそ柳樹らと生せざる事へはうるなり

○阿倍仲麿鬼となりて吉備大臣よわゝる說

俗說云吉備大臣遣唐使としして唐人を教を授ひて帰朝の樓よのぼりしに鬼あり害をなんとしてゐる吉備これを防ぎて樓よのぼりて鬼防ぎ戦いまた先に遣唐史の阿倍仲麿帰朝ならと唐人の云を教害せしを甚怨む樓よりて鬼と争ひ吉備よめ孫乃事弱冠の時漢土に渡り唐人樓よ来り吉備を防ぎ戦ひ唐人帰朝よ文選を与へ先わやまち

わゝびわざけつと為ゝてんと漢土に書いまゝ日城よりうされべしむとつかさを疑惑するさとりて吉備よ此の書牛皆和文選を渡ぶ予ゝを背よ負てひそかふ乃漢唐よ渡りさうちひろしと云てとをひ沙ゝ文選をあとろひろ吉備ゝ為ゝくこれをさう先ゝ業乃とく唐人をわざむさひそかふ文選を学して貝に駆れり唐人ゝ宝誌和尚よ歌を賞詩をけゝし先て吉備よらまゝむ弱よ解を弱ゝとわゝいざれ服を為さぐて命に仕吉大明神を管に祈言を会ぞろよいぐゝとなるくひとりの物怪に為乃ら不高線をひろ弱それよちさうひゐやをくゝみをとり唐命に仕く害矣のれりひ

をの〳〵凡人よわ〳〵どもいひてゆゝしてはなはよかつてゝしむ

今按ずるに妄說なり羅山文集安倍仲麿傳云仲麿ハ中務大輔正五位上船守ガ子なり其先ハ孝元天皇の皇子大彦命ナリ靈亀二年八月書紀ニ遣唐使ノ名ニ四元年ニ多治比縣守遣唐使ニ任ジ仲麿留学生ニ入テ玄宗ニ仕ヘ開元十六年ニ縣守ガ帰朝ニ及ンテ仲麿ハ唐ニ留リテ官ニ仕ヘ性聰敏ニシテ書ヲよく能ス縣守ガ帰朝ニ及ンテ仲麿ハ唐ニ留リテ官ニ仕ヘ性聰敏ニシテ書ヲよく能ス

かゝて勾衡と云ふ唐書に見ル玄宗ニ召サレテ秘書監と云ふ官ニ任ジ天宝十二年仲麿遣唐使ニ任ジ

清河と同船して羽ヲ出ス王維包佶陶海伯ヲ友トス

これをおくる詩の序の海晏ハ和名集ニ云ク唐人錢

鑑ニ云ク清河ハ唐人ニ名ヲ清河ト云ふ

を作見紙ヲ乃ち笑ヒを引て和哥を詠ス古今和哥集云ク唐ニ渡リテ月ヲ見テ故郷ヲ思フ

唐ニ渡リテ月ヲ見テ故郷ヲ思フ

ハ月ハ海ヨリ出ルナリ

ハ月ハ海ヨリ出ルナリ

人ハ皆ナ同ジ月ヲ見ル仲麿唐ニ渡リテ月ヲ見テ故郷ヲ思フ

加藤清正ガ云ヒシ如ク仲麿海ヲ渡リテ風ニ吹カレ清河ガ

を以て安南ニ漂流シ死ス人ハ皆ナ沒シタリと云ふ書大白詩を

以て哭ス見李太白詩集仲麿安南ヨリ帰ラントシテ大唐ニ入肅宗の

上元年中に小海帆同ジ出ようつされ三ヨ日を経て後仲麿

新羅宿衛王子金風帰ゴ帰よりの書を附ゴ新羅よりの
記（見續日本記）京雲臣ゴ新羅の使令狐王子書を新羅よりの
仲麿前後唐ゴよりの事又十年ゴ書籍をこの
ゴ帰よりゴをゆるせどゴ逗留して遂ゴ大唐又年
正月唐ゴよりて辛ゴ年七十（一説七十二）代宗皇帝これをいたゴ
渤海ゴ乃大和船を賜ゴ實ゴ新羅光仁帝ゴ寶龜元年ゴ
わたべ仲麿唐帝ゴ帝ゴ彼ゴ逗留して死せる事明
かなり○今按ゴに吉備大臣（一道ゴ吉備ゴいふ人ゴ
せゴ称して吉備大臣ゴ云）唐ゴ渡ゴ事ハ續日本
記を考ゴふ天平七ゴ三月吉備大臣遣新羅ゴ
死せどゴれゴ二十餘ゴを経て宝龜元年ゴ仲麿死せり又

宝誌和尚ゴ野ゴ蓋行を作ゴ
帝天鑒十三年ゴ寂ゴ
ゴ
○四村利仁異國ゴ
俗說乃お返ゴ
俗說乃鬼ゴ
俗說云坂ゴ四村ゴ利仁
加賀云私記ゴよりて
わらゴ海ゴ
ゴ云又云く利仁乃ゴ

宝誌和尚ゴ野ゴ蓋行を作ゴ
帝天鑒十三年ゴ寂ゴ
ゴ
○四村利仁異國ゴ
俗說乃お返ゴ
俗說乃鬼ゴ
俗說云坂ゴ四村ゴ利仁
加賀云私記ゴよりて
わらゴ海ゴ
ゴ云又云く利仁乃ゴ

なて摩那斯麻呂の大竹丸こゝの男をうの波大竹丸大たくまえ
かくまえんと以の劍をとりの左手にはめ田村ぐさ利をうしなひ
めをとりの麻呂の麻呂の藁よ麻呂所者こゝの人ゝ夫女をうに利家ひ
そこに通ゝと大竹丸と又無樹しゝの左田村々の女をとりいつをう
て大竹丸よりさがをセニつの劍をめをとまをセ三後麻呂よをゆて大
よ神ゝて鬼をうりと云りひ武ゝ丸田村々寄りかゝ丸紀世言伝
らをれ鬼を射しゝ申りこ云

今按ゝよ坂ゝ田村麿と利仁ゝ一人よりゝ氏孫後貝中
記よ坂よ田村麿ハ後漢霊帝の後ゝて坂ゝ刑田麻呂ゝ子
孫渤天皇の御宇九人なる大系圖を考ゝよ利仁大織冠

孫ゝ云の後胤藤原府の軍友原村長ゝ子酥酬天皇の御宇
の人なる年歴姓氏天よ異なり又田村麿異ゝ伝代事 此
なり御ゝ續日本記よ坂ゝ大忌寸坂田麿等上表言伝等
中ゝ後漢霊帝之曾孫の智ゝ後也塔田天皇御宇坂
北朱羽ゝをわをれがゝ漢霊の後ゝ貝中坂化の人今ゝ
為ゝ坂を関ゝてゝをうこゝ以ゆゝさをゝ伝ゝをうゝ不
勅ゝをゝうゝ説ゝ坂ゝ田中後紀云弘仁二年六月丙辰
大納言正三位右近衛大将兼中務卿坂ゝ大宮孫田村麻呂薨於栗田
別業時年六十二田村麻呂後二位乃京之更為右将軍中將坂
田麻呂ゝ正二位ゝ大義孫為長ゝ尺守勝厚一尺守月

蒙の驚駭編全編有り中而重冥則三百十行欲狩則卒
日行千里以怒目撥視禽獸惜伏平猶疾矢列老少列殺
あり又田村丸のごとく伊勢神宮に参詣ありし
貝伝後紀後貝伝後紀大系畧を考れば田村乃丸を廣世麻
呂と云伊勢物語の中に又坂東方大竹丸と申ものと
ちよつと参詣太神宮紀云弘仁元年九月平城天皇幸
祈乃所にて軍旅を率し奈良を出立て東国に除幸
のとき俄に天皇これを防ぎ給ふ時田村丸と
勅ありし六田村麻呂征夷大将軍とせり
つゝしんでいのる勅命をうけたまはり坂東に関を

まして先帝の所幸をかしこむ事なく
ゆゑ所見なく神力をもつて人数
勅旨をうけたまはりて俗に先帝の軍旅
成をうちたまふ奥列のうち丸悪徒を
せしよれ所をもて妄作したるものなり又坂東に流神系
譜を考ふ伊勢斎宮を祀りしゆゑ
あやまりなるべし
○百合若大臣ものがたり退治乃巻
俗説云筑紫国乃所生の人百合若大臣と云人
強力精気たくましくして貝伝を読みしゆゑ百合の物を

りてそをむひひ賊を射ころし初より及びて家に帰府と
いへ者返逆し大臣を元賊為よりて兵を後よりうを押領と
大臣不可思議の海士私よりたをけのせらまて海をしまを府を滅しまを
おさしと云伝へ世を後府内に大臣塚ありと云
今按ずるに百合若大臣の事正史及公卿補任に早分脈なるよ
ろこと但し後章記河内鈔稲家系に者灵天皇第六の皇子敦賀
命を藩屏の軍に作せて山陰道に侵略ありて西海に作藩屏
と称ずとそれらと代異賊を伝代して四方ちり代三韓神功
皇后三韓退治のときの先駆なり十四代の后墨十八代に
百男ときこえ伝りて十六代益躬蒙古見かの襲来のとき推古

帝の勅をうけてそをむひひ賊の魁首鐵人を射殺すと十八代
皇極天皇の勅をうけて捕列私波に流刑せらるる後に使私をめて攻撃
を来襲の時に公卿通ずる弘安四年蒙古の大軍月かの襲来
ありしとき八幡の告ありて白潮を本にして通ずるを公蒙
古の私に為せるをうけて通ずるを私に潜しを数十人を切伏たるを
捕捉せしの行ぐ一族家人に引府と云者多くひとりこうとしい
蒙古の勾欄たりと云欄を通盤東西通盤に通ずる勾欄と云
一説漢書綱鑑大全に云ふ勾欄し記せり中京廉富が日記
に云ふ勾欄をこうりと訓ずと若国物に欄を音つとしりこうりと
百合若大臣の事は張業記に投て作りかりくりを謬伝て始る

乃右墓たしをなすりかりん

○在原行平次摩浦ゟ流されし松風村雨ゟ遠流

俗説云中納言在原行平乃ゟ人の讒ゟ以て播州須磨浦ゟ
流ゟ山平ゟ松風村雨ゟ二人姉妹乃蜜女ゟ行平ゟ
ゟ後勅免ゟ帰京ゟ
ゟ二人のゟ行平ゟ
ゟ行平ゟ
ゟ行平次摩浦ゟ配流乃中ゟ

恠ゟ後撰集ゟ仁和帝御代乃行幸ゟ
一日在原行平朝臣　さがの山行幸ゟ行平乃
ゟ同日奉勅ゟ狩衣乃ゟ
ゟ行平ゟ
ゟ行平乃ゟ
ゟ行平乃ゟ
ゟ行平ゟ
ゟ行平ゟ
ゟ行平ゟ
帝御年五十七ゟ
一日ゟ行平ゟ

ところ事にあたりて津の国の須磨といふ所にこもり侍りける
に宮の内に侍りける人につかはしける在原行平朝臣とある
とふ人あらば須磨の浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ撰集抄によむ
く行平中納言といふ人おもきつみにあたりて須磨にありける時
須磨の浦にながされて住給ひける浦づたひしありきけるに
あまのいとけなきあまをとめ二人にかよひてたえずあはれみける
のよしみつねどもふしをとこ中納言のかへりのぼるとて
(此時今ハ古主)とよみ給ひける中納言いとかなしくおぼしてよみける
うたはいなばの山のとよみけり此説に附會して松風村雨と
作りなして又さまざまのいひつたへを作りて須磨の浦に家集

いなばの峯におふるまつとしきかば今かへりこむ(行平 斉衡二年正月為因幡守)頃なれば
人によみて後の事なれば播州にてよめる歌にはあらずと見えたり
これ今は行平のながれの家は須磨にありて流されたる女のことを
業平によりて盛りの鄙にてことを好む者が書ともしらずして
妄作したるなるべし

○在原業平卒去の年をしらずして昇天せりと云説

俗説云在原業平ハ卒去の年をしらず仙術をもちゐて昇
天せりと云

今按ずるに三代実録に元慶四年五月廿八日辛巳従四位上行右
近衛権中将兼美濃権守在原朝臣業平卒すとある大和

因石と在原山光ゐるを菊地乃うゝ和仏の玉葉集よ立歌ちゑ
て徒三位乃みかくべりうを名ゐりて玉葉乃七り九位をゐを
ゆ乃とゐ也べ俗説乃ゐ返を紀べー

○綿丸ハ延喜帝第四宮ゆ一名盲目とゐの説

俗説云綿丸ハ延喜帝第四乃宮なりとゐれ盲目にて琵琶を深くゆ乃ゐれ姉よ逆髪ゑ
出乃ゐ乃と延喜帝業深懺悔乃為よりてさうゞみをゞ剃ひよりて綿丸
をゞ根坂よりて分乃ゐれよゐ乃ゐ後世土坂と書し定ゑ坂名わ
と混雑ニ位ゆ〻〻逢坂よ捨りて綿丸ハ琵琶をならひゐゑ
今按乃ゐニ光流教乃ゐ説よ世人綿丸を盲目とゐ乃やゐ乃

後撰集よ逢坂乃関を詠乃ゐ乃ゐ乃ゐ
人とゐて乃ゐ乃 こゝ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ
ゆ坂乃関とゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ
ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ
ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ
ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ
ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ

り時代大よそ後せりなるべきの事なるべしなり歟史小說紙
運採よりとるべき王坂巳宮河原の事係れたり小所家集よ
り出でたるなるべし作者未詳風物くさ
無版とかくべきなり
明治十一年刊行志よりも宮河原とい化明帝第四宮人親王の
舊記なりなどと記せり

奉朔俗說弁三

尤海堂